わたしのしるし

小　三

わたしの右足のうらには、生まれたときから赤いあざがあります。大きくなっても大人になっても消えないあざです。わたしはそのあざに、ほ育園に通っているころに、はじめて気づきました。ちょっといやだなと思いました。はずかしい気持ちがしました。お母さんに、

「どうしてお母さんにはないのに、わたしにだけ赤いのがあるの。」

と聞くと、

「これはしるし。あなたがあなたって分かるしるし。」

とお母さんは言いました。しるしかぁ。なぜかいやな気持ちが少しへりました。

小学生になったころ、今までなかったところにそばかすをいくつか見つけました。またちょっといやだなと思いました。お母さんに、

「茶色い点がふえてる。」

と言うと、お母さんは、

「しるしがふえてあなたが分かりやすくなったしいいやん。」

と言いました。また、ふしぎといやな気持ちがへりました。

どうしていやな気持ちがへったのか考えてみました。しるしはまほうの言葉かな。いや、わたしだけのオリジナルって言われてる感じ。それはそれで悪くない。そう思ったら、いやな気持

ちが小さくなることが分かりました。

わたしとお母さん。同じところはおでこの形。親子だけどちがうところもたくさんあります。同じはうれしいけれど、ちがうところはわたしのしるし。お母さんとお友だちのお母さん。大きなちがいがあります。お母さんは、神戸でそだちました。だから、お母さんはかん西べんで話します。でも、わたしはそんなお母さんがいやではありません。お母さんらしくてすきなところです。わたしとお友だち。もちろん、ちがうところがいっぱい見えます。親子でもちがうのだから、お友だちとちがうところがあるのだってそんなもの。わたしらしさとお友だちらしさがあるのは、いやなことではありません。わたしにしかないしるしってていい感じ。